

県民と調べる徳島南部の鞆浦漁港で水揚げされる魚類と それらの地方名

交付番号：23009

徳島県立博物館 井藤大樹

はじめに

徳島県海部郡海陽町鞆浦に位置する鞆浦漁港では、大敷網と呼ばれる全長約 1300m、幅約 100m におよぶ大型定置網をはじめ、小型定置網（つぼ網）、刺し網（エビ網、ヒラメ刺し網）などによって漁獲された多様な魚類が水揚げされる。しかし、これまで鞆浦漁港にどのような魚類が水揚げされているのかを学術的に調査した例はない。海部郡の沿岸域は、南海トラフ地震を想定し、防潮堤の設置が急がれるなど、その環境は近年、大きく変わりつつある。さらには、地球温暖化に伴う海水温の上昇により、今後数年から数十年で生息する魚類が変化するという事態も十分に想定される（井藤ほか、2023 参照）。一方で、海部郡沿岸域に生息する魚類についての情報は、牟岐大島とその周辺の浅海域の魚類を調査した藍澤・瀬能（1991）以外にほとんど知られていない。このままでは、海部郡沿岸域に生息する魚類の情報が得られないままに環境が改変され、魚類相の変化や魚種の減少、絶滅が起こりうる。また、海部郡沿岸で漁業を営む人数は年々減少し、年を経るごとに水揚げされる量も減少していくことが予想されることから、早急な調査が必要とされる。そこで本研究では、県民・研究者から構成される草の根研究会である「阿波魚類研究会」のメンバーと共に鞆浦漁港に水揚げされる魚類を調査することで、情報の乏しい県南部の沿岸域にどのような魚類が生息するのかを明らかにしようとするものである。さらには、前述のとおり、今後、海部郡沿岸で漁業を営む人数は減少し、魚類に関する方言（＝地方名）も消失していく可能性が高いことから、鞆浦漁港に水揚げされる魚類の地方名も

合わせて記録した。

方法

1. 調査場所

徳島県海部郡海陽町鞆浦山下 (33°35'36.0"N 134°21'36.1"E : 図 1) に位置する鞆浦漁港にて水揚げされる魚類を調査した。漁港で得た魚類は徳島県立博物館 (徳島市八万町向寺山) に持ち帰り、標本を作製後、徳島県立博物館魚類標本 (TKPM-P) として登録・収蔵した。

2. 調査方法

魚類調査 大敷網での漁期 (7月上旬から11月上旬までは休漁) に合わせ、2023年5月26日、2023年6月18日、2023年7月2日、2023年11月19日、2023年12月10日、2024年1月28日、2024年2月18日、2024年2月25日、2024年3月10日の計9回の調査を実施した。2023年5月14日、2023年9月24日にも調査予定であったが、波浪と潮流の影響で漁ができなかったため、漁港まで行ったが、魚類の採集については実施できなかった。2~7名で調査を実施し、鞆浦漁港に水揚げされた魚類の一部を調査者が採集し、鞆浦漁業協同組合から許可が得られたものを買取り、徳島県立博物館に持ち帰った。持ち帰った魚類については、10%ホルマリン水溶液にて鱗立てを行ない、その後に標本写真を撮影し、撮影後は10%ホルマリン水溶液にて1週間程度固定した。固定後は流水中でホルマリンを抜いた後、エタノール水溶液中にて保存した。各魚類の同定については、中坊 (2013)、沖山 (2014)、Matsunuma et al. (2024) に従い、学名については本村 (2024) に従った。

地方名の聞き取り調査 魚類調査と同日に鞆浦漁港にて、徳島県立博物館に持ち帰る各魚類を見せながら地方での呼び名を聞き取った。主に鞆浦漁業協同組合の組合長である河

野亮平氏から地方名を聞き取り，必要に応じて漁師からの聞き取りも実施した。

結果

本調査により，79科約144種の魚類が記録され，それらのうち，約138種を徳島県立博物館に持ち帰り標本とした。これらは，191ロット415個体に上る。鞆浦漁港で漁獲される魚類の大部分が大敷網によるものであった。記録された地方名を含む魚種のリストおよび標本写真は未発表データが含まれるため本報告書には掲載していない。記録された中でもっとも種数が多いのはアジ科魚類（17種）で，次いでサバ科魚類（9種）であった。

2023年12月10日に漁船に同乗し，大敷網での漁の様子を記録した。大敷網での漁の様子および水揚げの様子は図2に示した。

考察

2023年度の調査によって約144種の魚類を記録することができた。この中には，これまで徳島県から記録がなかった種も確認されており，徳島県南部の沿岸に分布する魚類についての新たな情報を含む成果が得られた。一方で，水揚げされる魚種はその日の天候や潮流，あるいは年単位で変化する黒潮の流路状況によって異なるため，1年間（計9回）の調査のみでは，鞆浦漁港に水揚げされる魚類を網羅できなかった。例えば，ボラ *Mugil cephalus cephalus* は当該漁港で普通に水揚げされるが，本調査では記録できなかった。また，外見的な特徴が類似し，現地での同定が難しい分類群（アジ科の一部など）では，水揚げされたすべての種を収集・記録できていない可能性が高い。したがって，今後も鞆浦漁港に水揚げされる魚類を継続的に調査し，できる限り当該漁港に水揚げされる魚類の網羅的な記録を目指す必要がある。少なくとも，引き続き1~2年間の調査を継続する予定である。

本調査では，アジ科魚類とサバ科魚類の種数が他の科に比べ多く記録された。これらの

魚類は遊泳性が強いことが知られる。これら魚類が多く記録されたのは、回遊する魚類を漁獲する大敷網の漁法としての特性を反映しているものと考えられる。きわめて種数が多く、藍澤・瀬能（1991）でも最も多くの種が確認されているハゼ科魚類は、本調査ではまったく確認されなかった。これは、ハゼ科魚類には底性かつ小型なものが多く、大敷網で漁獲されにくいとめと考えられる。

1990年に徳島県立博物館が開館以降、県南部の海域に分布する魚類の標本は、約830ロットが登録されてきたが、本調査により、191ロット415個体もの標本が新たに登録・収蔵され、県南部の海産魚類の資料を充実させることができた。これらの資料は、一部を徳島県立博物館の常設展示室にて、2023年10月3日～2024年3月31日まで展示した。さらに、今後の当館での展示や普及教育、研究活動などに活用する予定である。

阿波魚類研究会からは9名が調査に参加し、ほぼ全員が鞆浦漁港での水揚げを初めて経験した。参加した研究会メンバーは、漁の方法や水揚げの様子、水揚げされる魚類について、興味深く観察し、水揚げの手順や魚類の名称・識別などを自発的に学ぶ様子が認められた。本調査を足掛かりに、研究会のメンバーと共に地域自然史研究を進展させ、生物多様性が支える地域の水産業についても広く周知していく。

本調査で得られた成果については、今後さらに調査を1～2年間ほど継続し、鞆浦漁港に水揚げされる魚種をある程度網羅した上で、論文としてまとめ、投稿する予定である。

謝辞

鞆浦漁業協同組合の河野亮平組合長並びに漁協職員、漁師の皆様には漁港内での調査や魚類の購入に多大なご協力をいただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

引用文献

藍澤正宏・瀬能 宏. 1991. 徳島県牟岐町大島およびその周辺の浅海性魚類. 徳島県立博

物館研究報告, (1) : 73–208.

井藤大樹・庄野耕生・瀬能 宏. 2023. 徳島県から得られた分布北限記録となるヨウジウオ科の稀種ホシイッセンヨウジ. 魚類学雑誌, 70 (1) : 119–124.

Matsunuma, M., A. Ujihara and H. Endo. 2024. Two new species of *Aulotrachichthys* (Beryciformes: Trachichthyidae) from the northwestern Pacific. *Ichthyological Research*, 71: 56–82.

本村浩之. 2024. 日本産魚類全種目録. https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/20240218_JAFList.xlsx. 2024年4月21日確認.

中坊徹次. 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 2428 p. 東海大学出版会, 神奈川県.

沖山宗雄. 2014. 日本産稚魚図鑑 第二版. 1639 p. 東海大学出版会, 神奈川県.



図 1. 徳島県立博物館及び鞆浦漁港位置図.



図2. 漁・水揚げ・競りの様子.